

はちみつの夜 竹森裕紀



ここ、水上ビルのはちみつ屋さんには、最近、不思議な出来事が多発している。店を閉め、朝、店を開けに行くと、鍵をかけていたにはちみつのビンが倒れているのだ。

今日は、この問題の真相を教えてくださいませましょう。

夜、店を閉め、店主が帰っていくと、

「わーい！今日は僕達が一番売れたぞ！ やっぱ僕って人気ある〜！」（アカシア）いきなりはちみつが喋りでした。どうやらココのはちみつは、喋って動くらしい。

「何よ。あなた、一番下っぱのくせに得意げな顔しちゃって、昨日は私たちが一番売れたわよ」

この店の中で一番長く売られているはちみつ《サクラ》が喋り出した。お店の中で、オスメナンバーワンという事もあり、はちみつの中ではお母さん、お姉さんの存在なのだ。

「やーい。長くいるからって、偉そうにするなよ。そういうの嫌いなんだけどおー」
「だまりなさい！」

また始まってしまった。いつもこの二人がケンカをする。すると中間くらいのはちみつが《梨》。

「まあまあ、そう言わずに。僕達、せっかく会えたんだから、仲良くしようよ。ねっ」と言ってもふたりは聞こうとしない。

ふたりがにらみ合いを始めた。ふたりは鋭い目付きで相手を見る。すると……

バシッ！

サクラがアカシアを叩いた。その勢いでアカシアは、棚から転がり落ちていき、床に叩きつけられた。

「始まるぞ……」

サクラが暴走する。あらゆる物を叩き落とす。全く関係のない物（他のはちみつ等）まで。

ガラッ。店主が入って来た。

「あー、また？ もう！ 誰がこんな事をするの？」

店主は、床に転がっているはちみつを見てつぶやいた。

でも、誰がやっているかなんて分かるはずがない。だって、犯人ははちみつ（サクラ）なんだから。



ビルになった船たち

朝岡みゆき



牟呂用水ができて間もなくして、船が走り始めた。その船は、川幅に合わせて造られたため横幅は狭いが、縦に細長く、高さもビルの三階から五階建てほどある大きな船だった。船は、いつしか十五隻が集まり、およそ八百メートルにおよぶ長い列を作った。

造船されてまだ新しいその船たちは、牟呂用水から三河湾へ出て、太平洋という大海原を目指していた。まるで町を出て大都會を目指す若者のように。

船たちは、豊橋駅を手前にして、一時、停泊することにした。先頭を走る船が、「ここで少し休もう」と二番手の船に提案すると、それは次々と伝達され、最後尾の船から、「いいね、そうしよう」と返事がきた。街の中で、再び出航する日までの短い時間を過ごすことで、全隻の意見は一致した。

しかし、そうしているうちに、荷も積まず、人も乗せない空っぽの船に、人が集ってきただ。一階部分には、花火店や駄菓子店、喫茶店やバーなどの店舗が入り、二階以上の部分には、居住スペースとして人が住み始めた。店舗や住居人のもとを人々が訪れ、船の周辺で生活を営む街の人々との交流も生まれた。

やがて、船たちは、花火店や駄菓子店に来る子供たちの笑顔に癒され、喫茶店に集まる人々の、三河弁丸出しのばか話に一緒に笑い、眠れない夜は、バーから聞こえてくる優しいジャズの音色に客とともに耳を傾けた。

船たちは、街の中で、朝陽が上がれば街とともに目覚め、昼には街の人々とともに生活を営み、夜になれば街とともに深い眠りについた。もはや、船たちは、空っぽの船ではなかった。

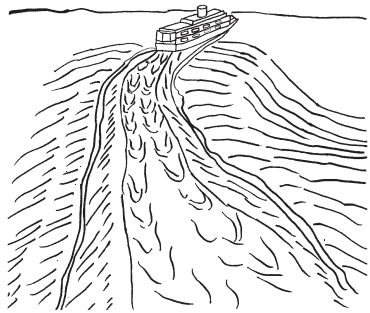
船たちは、街の灯火の一つとなることを決めた。まるで、夜空の星と星が線を結んで、美しい星座を作るように、灯火と灯火が線を結んで、人々の思いを繋ぐ絆となった。

先頭の船が、「どうだん、ここで暮らすまいか」とすっかり馴染んだ三河弁で、二番手の船に相談した。それは伝達され、最後尾の船を折り返して、次々と返事が戻ってきた。「いいじゃん、そうしまい」と。

船たちは、用水路に浮かんで漂う生活から、用水路の上に建つビルとして生きる道を選んだ。船たちは、十五隻の船から、十五棟の連なるビルになった。

それから、五十年が経った。ビルたちは、いろいろあったけれども、いい人生だったなあ、と振り返る。それでも、足元に水の流れる音が聞こえた時は、ふと思うこともあった。もし、あの時、太平洋を目指していたらと。選ばなかった人生など存在しないことはわかっているのに。

夜空に北極星を見つけると、北極星を目印に大海原を航海する姿を想像して、心が小さく揺れた。そんな時は、ほんの少しだけ、ビルの位置が前へ進んでいたのかもしれない。



先代は子煩悩だった

豊田健一



その店は水上ビルの中ほどにあった。僕は若い頃、仲間と広小路通りや松葉通りで飲んだ後、この店でみそラーメンを食べた記憶がある。初めて食べたみそラーメンはとても美味しく今まで食べたラーメンより濃厚で気に入った。その日も僕は友人と赤いカウンターに座っていた。友人は競馬ファンで店主と昨日の有馬記念の話をしていた。

「昨日の有馬ようついたのですね。一万八千円ですよ」

「最後の直線でニッコーチドリが追い上げたからねえ」

店主も競馬好きなようだ。店主の額には小さなバンソウコウが貼ってあった。いかにも職人といった風情だった。隣で奥さんが皿を洗っていた。夫婦二人で営んでいるようだった。

月日は流れ、あれから三十年が経った。一旦豊橋を離れていた僕は、また郷里の豊橋に戻って来た。そして、そのみそラーメン屋を思い出し、また『くるまや』のラーメンを食べたくなった。さっそく藤の咲く四月に一人で出かけてみた。店があった。まだラーメン屋はやっていて、白いノレンを僕はくぐった。カウンターは昔のままの赤いカウンターだ。懐かしい！ 一気に三十年前のあの日に返ったようだ。僕はためらわず「バターみそラー

メン！」と言った。「ハイ！少々お待ち下さい」と店主が返してよこした。若い！まだ三十代のようだ。話を聞くと、先代が亡くなり跡を継いだ息子さんのようだった。僕はバターみそラーメンをすすった。味はまあまあだが店主の表情が暗い。話をしているうちに内情が分かった。全国展開しているラーメンチェーン店もご多聞に漏れず、この界隈にも出店し、ここ『くるまやラーメン』も採算が思わしくないようなのだ。

「オヤジが残してくれた店だし、だがここんとこ厳しくてねえ」

「それで何か打開策はあるの？」僕は聞いてみた。

「それがこれと言った妙案が浮かばなくて」店主の悩みは深刻なようだ。

それから数か月が過ぎ店主は夢を見た。

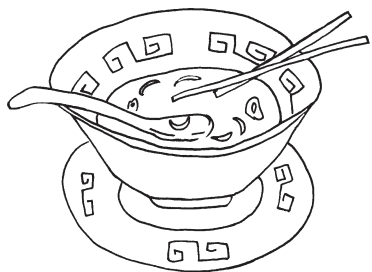
オヤジがこともあろうに店のカウンターでカレーを食べているのだ。まかないだろうか。頭に豆絞りをして黙々とカレーを食べている。

目覚めて店主は昨夜見た夢のことを妻に話した。妻の良子は、

「それはきつとお父さんのアドバイスよ！お父さん生前子煩悩だったってお母さんが言ってたから。あなたの悩んでいる姿を見てじっとしていらなかったのよ」と言った。

それからさらに数か月経ったある夕刻、僕は『くるまやラーメン』の軒先に豊橋カレーラーメンののぼりがひらめいているのを見た。

「豊橋カレーうどんがあるのだからカレーラーメンもしかりかと僕はほくそ笑んだ。」



ビルの下に川は流れる 北川裕子



よく見るとそれは奇妙な光景だった。大きな生き物のようにゆっくりと蛇行する細長いビルは、見通せない距離まで延々と連なっている。建物に沿って、両側にアーケードが掛かった歩道が続き、そのまわりを互い違いの一方通行の自動車道が挟む。ビルの一階には約五メートルの間隔ごとに間仕切りされた商店が、食堂、靴屋、はちみつ専門店、美容室……と軒をつらねる。商店街といえば、道の両側に店が広がるのが一般的だが、ここでは逆に、商店街を挟んで人や車が通りすぎっていく。ビルとビルの間には、「○○橋」と文字が刻まれた欄干がひっそり佇む。そう、まちの人たちが「水上ビル」と呼び親しむこの建物は、川の上に建っているのだ。

水上ビルができて五十年あまり。その下にいまも川は流れているが、すっかり姿を消してしまい、まちの人々にも普段は忘れられた存在だ。ここが川であったことの証明とばかりに、ところどころに残る橋の名前にも、わざわざ目を留めることなく人は通り過ぎてゆく。知らないうちに、背中の上にとっかかりと重たいコンクリートの塊を乗せられた川の気分はどうだろうか。

「以前は魚が跳ね、近所の女たちが洗濯をしに集まっては長いこと座り込んで井戸端会議

をしたものだが、いまではすっかり暗闇に閉ざされたまま。まあ愉快的気分ではないわなあ」

つまらなそうに彼はつぶやく。しかし、そんな彼にも残された仕事がある。東西に連なるビルの軒下には、朝は東に広がる山手から冷たい風が滑り込み、夕暮れになると反対に西から海寄りの風がのぼってくる。姿を見えなくとも、人知れず、彼はずっとこの商店街に川風を運んでいるのだ。

「まったく面白くもない仕事だよ」と、彼はうそぶいた。

五十年の間に半分ほど店が入れ替わり、商店街の景色も徐々に移り変わっていく。だが、ずっと変わらないものもある。かつては主人とともに青果市場に野菜を卸し、忙しく働いてきた八百屋の女将さんは、年を取ってからは猫をおともに日がな一日、軒先でのんびりと店番をしている。冬のあいだは陽当たりのよい南側でひなたぼっこをし、夏は日陰になる北側に場所を変える。それが、もう何十年も変わらぬ彼女の決まったポジションだ。

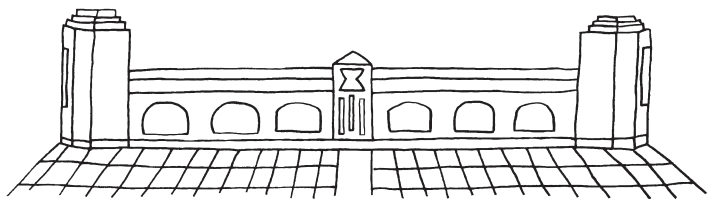
例えば梅雨時の午後、夕暮れが近づき、女将さんが蒸し暑さのため息をつく頃には、西

から涼しい風が通い始める。

「五十年、思えば長い付き合いだ。暑さで倒れられても困るからね」

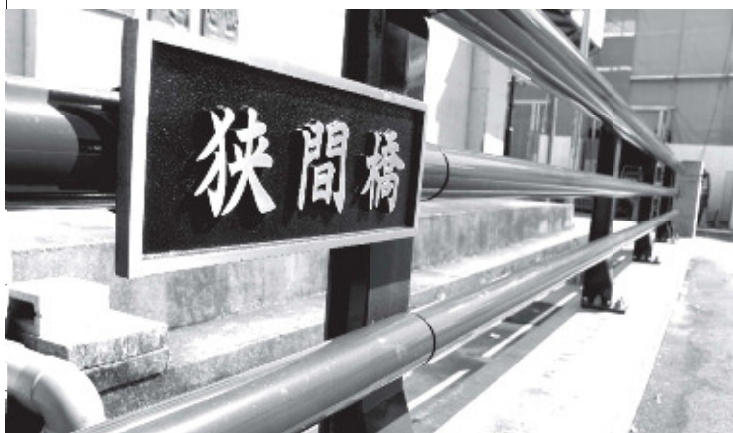
古びたコンクリートのビルの下には、いまでも川が流れている。

朝夕の風だけが、ひそかにそれを主張する。



時の狭間に狭間橋

磯村彩葉



——失せものがあるなら、梅雨の時期に狭間橋^{はざま}へ行ってごらん。狭間橋は時間と時間をくつつける接着剤。きつと過去に失くしたのも、そこにあるはずだから——

それは、ある日の祖母の言葉。

狭間橋というのは、愛知県豊橋市のある川にかかっている小さな橋のことだ。梅雨の時期に狭間橋へ行けば失くしたものがみつかる……なんて、そんな現実味のない話、今まではまとも信じたことはなかったけれど……六月某日。僕は柄にもなく、噂の狭間橋へ来ていた。祖母が亡くなってもう十年。また豊橋に戻ってくるなんて思ってもいなかったな。

「しっかしよく晴れている……」

梅雨の時期……といっても今日は雲一つない晴天だ。とても何か特別なことが起きると思えない。狭間橋の下には、ゆったりと川が流れているのみだ。

やっぱり噂話はしよせん噂話と言うことか。

帰ろう……そう思って振り返った時、僕のことをじっと見つめる一人の少女と目が合っ

た。年は同じくらいだろうか。最近はあまり見ない、ちょっと派手な水玉模様のワンピースを着た、短い髪の女の子。彼女は僕をじっと見つめた後、

「何か探しているん？」

と、話しかけてきた。

「いや……別に」

梅雨の時期に狭間橋へ行くと起こる出来事を待っていた……なんて、言えない。言葉を濁してその場を去ろうとすると、不意に腕を掴まれた。

「分かった。『雨の日商店街』を探しているんだら？」

「雨の日商店街？」

「うん。この水上ビルで梅雨の時期だけ開かれる特別なイベント」

商店街？ イベント？ なにを言っているのだろう。ここにはただ悠々と川が流れているだけなのに……

「って……え？」

そう思って、川に目を移した僕は、自分の目を疑った。いや、そもそもそこには川なん

てなかった。先ほどまでは確かに川が流れていたそこには……信じられないことに、古びたビルが堂々と立ち並んでいたのだ。

「こっち来りん」

レトロな容姿の少女は、呆然とする僕の手を遠慮なく引いてビルの方へ向かってゆく。

「待って、なにこれ！　なんで突然ビルなんて」

「え？　知らないの？　ここには年に一度、水上にビルが現れて、雨の日商店街が開かれるんだよ」

「雨の日……って、今雨降ってないじゃん！」

「ふふ、雨の日商店街は晴天決行だよね」

なんだそりゃ……ってどうか、全然説明になってないし。

そこは商店街というだけあって、細長いビルの中に様々なお店が詰め込まれていた。

駄菓子屋さん、雑貨屋さん。たばこ屋さん、喫茶店。花屋さんや自転車のリサイクルショップまで……最近ではあまり見ない古風なデザインの看板がひしめき合う感じは、懐

かしくもあり、なんだか新鮮だった。

「あ、おじいちゃん久しぶり！」

「おお、元気にしとったか？」

「うん」

僕の手を引く少女は、道行く人々にあいさつをしては足早に進んでゆく。

店の前で大きな楽器を吹き鳴らすおじいさん。ジェラートを売る小さなワゴン。

「この店はやってないの？」

シャツターが閉まったままの店を指させば、

「ここは日曜日休みだから」

と言われた。特別なイベントの日なのに、そんなこともあるのか……なんてマイペースな。

「ところで、なんであなたはここに？」

少女はふと首を傾げて尋ねた。

「……ここに来ると、失くしたものが見つかるって……祖母に、聞いたから」

僕がそう言うと、少女はくくつと笑って、

「見つかるといいね」

と、他人事のように呟いた。いや、確かに彼女にとっては他人事なんだろうけど。

「君はどうしてここに？」

まるでこの土地を知り尽くしているような素振りだったけど、彼女は一体何者なのか。尋ねると、

「水上ビルが好きだから」

と言って、また笑った。

すれ違う人たちが皆親しそうにあいさつをして語り合って……店主も客も自由に過ごして……確かにこの雰囲気はなんだか心地よくて、好きになるような気持ちもなんとなく分かるような気がする。

それからいくつか雑貨屋を周って、ベトナム雑貨のお店や小さなサポテンがいくつも並べである不思議な雑貨店も覗いてみたけれど……探しものは見つからない。その代わり、何度も往復していた所^せ為^いで、花火やおばあちゃんに顔を覚えられてしまった。

「どうだった？」

と、少女に尋ねられたのは、夕日の落ちかけた狭間橋。

「見つからなかった」

「それは残念」

商店街のお店は揃って店を閉める準備をしている。どうやら雨の日商店街はもうおしまいのようだ。

「でもさ、楽しかっただら？」

「うん、まあ」

懐かしくて、温かくて。今の街にはないような独特な雰囲気に包まれるうちに、いつの間にか失くしてしまった感覚が久々に戻ってきたような気がした。

「もしかしておばあちゃんが言っていた失せものって……」

この感覚のことなんだろうか。

「ん？ どうしたの？」

「いや……なんでもない」

「ふうん？ まあ、また梅雨の時期になったらおいでん」

「うん」

独特な細長いこのビルを、また巡りに来るのも悪くない……

「って……え？」

ビルに目を向けた僕は自分の目を疑った。いや、そもそもそこにビルなんてなかった。

あるのは、狭間橋の下を静かに流れる川のみ。あれだけ歩いていた人の姿すらない。

「もう、今年の雨の日商店街は……」

おしまいなの？ と尋ねようと振り返ったのに、あの少女の姿すら消えていた。

「また梅雨の時期に……か」

晴天決行、水上ビルの雨の日商店街。どこか懐かしくて温かな商店街。せつかく顔も覚えてもらったし、また来年行くのも悪くない。

時の狭間にある狭間橋から……失くしてしまった感情を巡りに。